

## 揺れる境界線 — 砂丘館という場所

大倉 宏

### 「砂丘館」ができるまで

砂丘館は、新潟市が所有する歴史的建造物「旧日本銀行新潟支店長役宅」が、市の管理から、2005年に一般公募による指定管理に変わったときに、応募した団体のひとつ「新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体」（以下「共同企業体」）が、管理運営の提案書において通称として、提示した名称である。

共同企業体は、NPO法人である画廊「新潟絵屋」と、新潟市上大川前通10番町にある同画廊から、徒歩数分のところに本社のあるビルメンテナンス会社株式会社新潟ビルサービスで構成され、提案書では施設の管理を後者が、自主事業を前者が担当するとした。

提案の通称は、立地が新潟の海岸近く、海に平行してつらなる砂丘列の頂部近くであることと、新潟で少年時代を過ごした画家・絵本作家三芳徳吉の絵本「砂丘物語」に建物付近が描かれていたことにヒントを得て着想されたものである。共同企業体による最初の管理運営は2005年7月から08年3月までの2年9ヶ月。続く第2期公募でも同企業体が指定管理者に選ばれ、この公募時に砂丘館は正式の通称となった。

今回の特別展示の行われる2012年9月は、砂丘館が誕生して7年と3ヶ月目になる。

建物は1933年、日本銀行新潟支店の支店長家族の「役宅」（役所でいう「官舎」）として建設された。洋室2室、和室9室、倉庫、バックヤード等からなる近代和風の住宅である。500坪あまりの細長い敷地の南側は日本庭園になっている。戦前の各地の日銀の支店長役宅には、必ず土蔵の倉庫が付属していたようで、これは災害で支店が損傷を受けた場合、役宅が一時的に支店業務を担うことが想定されていたためであり、新潟の役宅では移築された土蔵の外壁がコンクリート

で補強され、日本銀行券の厳重な保管庫として設計されたらしいことの伺える造りになっている。実際には歴代支店長たちや家族、客人たちがビリヤード、卓球等を楽しむために使われたらしいこの倉庫が、最初の指定管理の開始前に改装され、スポットライトや展示用パネルの設置されたギャラリーになった。

### 新潟絵屋から砂丘館へ

共同企業体はこの倉庫のギャラリーを主会場とする企画展を、自主事業の柱とした。企画展のベースには、共同企業体の一員である新潟絵屋の活動がある。新潟絵屋は2000年6月に発足した画廊で、当初から複数のメンバーによる共同経営で、月に3回ベースの企画展（主に現代の美術家の個展）を続けて12年になる。企画展では必ず企画者（ほとんどの場合個人）が明示されることが特色で、運営委員と呼ばれる共同経営者、企画委員と呼ばれる協力者たちが、各自の企画を持ち寄り、希望する企画展を、画廊がサポートして実現するという仕組みをとっている。

もうひとつの特色が、新潟絵屋の展示空間である。大正期に建てられた店舗兼住宅であった町屋の、「ミセ」と呼ばれる店舗部分を改装した展示室は、土壁、格子の壁、和紙を貼った板壁、漆喰で塗り固めた壁等からなり、また建築当初からあった、しかし改装前には隠されていた欄間障子をあらわしにするなど、日本家屋の内装を意図的に顕在化、引用した造りになっている。この背景には当初の構成メンバーが、日本の伝統的木造建築に親近感を持っていたこと、町屋のある新潟の下（しも）と呼ばれる地域が、戦災に逢わなかった新潟の中でも戦前の建物（町屋や長屋）の多く残る地域であり、画廊の存在自体が、地域住民にはあまり自覚されてきていないように思われた歴史性の鏡になればとの思いがあった。

日本家屋の要素を持つ展示空間で企画展を開催する画廊が、砂丘館では日本家屋そのものを展示空間として企画展を開催することになった。実際、ギャラリーに改装された倉庫ばかりでなく、洋間、日本間からなる住居や本来の接客スペースの壁や空間も展示会場になる。その結果、軸装の書や画が掛けられてきた床の間に油絵が、抽象絵画が、今回のように写真が、あるいは現代の立体造形が展示される。

## 日本の家と近代美術

新潟絵屋の運営委員のひとりである私は、このことにも意義を見いだしている。というのも、日本の家がかつて床の間に絵が飾られ、襖には絵が描かれ、欄間には彫り物が施されというように、今で言う美術的造形が住まいのなかに日常的に在ったが、近代美術の出発以降、住まいと美術的表現が決定的に乖離してきた現象に、かねてから注目してきたからである。日本人が住まいと異なる展覧会場という場で、近年のホワイトキューブのような、住まい的要素を完璧に消去した空間で、権威づけられた形で美術と接する形が定着することにより、住まいから伝統的美術的造形が形骸化、もしくは消滅するとともに、美術は家ではなく展覧会場で見られるものだという意識が醸成されてきた。美術品は高級品の代名詞となり、広く購われないものになり、それが美術家を生きにくい職業にする一因になってきた。<sup>\*</sup>

新潟絵屋の展示空間を、あえて伝統的住まいに近いものとしたのは、切り離された日本人の住まいと美術をつなぎ直し、両者の共存する光景を目になじませ、大げさに言えば美術をめぐる現在の状況のささやかな、けれど意義ある変革を行いたいとの思いからでもあった。砂丘館の企画展は、この考えの延長に行われてきたものでもある。

こうして現れた光景は、新潟絵屋での経験があるせいか、私には自然に映るけれど、特異な光景として珍しがる観覧者もあり、格別に興味引かれる人たちも——ひそかにそこが期待するところでもあったわ

けだが——あった。今回の特別展示の企画者である石井仁志さんもその一人である。

数百年の多様な試行錯誤のなか、美的形式として完成度を持つようになった書院座敷、しかし役宅(≒官舎)らしく装飾性は適度に抑えられた砂丘館の日本間は、多様な現代の美術表現を浸食しすぎることなく、けれどホワイトキューブにはない質の響きを与える共鳴板として機能する。

<sup>\*</sup> 大倉宏「家・画廊・美術館」(「19世紀学研究」第6号 19世紀学会・19世紀学研究所 2012)

## 境界線を揺らす

日本の家に現代の美術が置かれる光景に、この施設の他の特色が絡みあうことで生まれた現象がある。

砂丘館は企画展を自主事業の主軸とするが、伝統的な日本家屋を活用とした「伝統を学ぶ」事業も行っている。日本庭園や日本の家を学ぶ講座、日本の年中行事を学びながら家内の装飾を創作する「季節のしつらい教室」などを市内在住の講師の方々の力を得て実施している。

そこに集まる人の輪が広がり、そうしたサークルの拠点ともなってきた。また日本間やギャラリーは、公民館のように一般利用にも貸し出される。サークルの集会、ほか多様な目的で市民が貸し室利用する部屋(日本間)が、そのまま企画展の会場になったりするわけで、俳句の会、文学の勉強会、お茶や生け花の教室、ヨガの教場などとして使用しながら、人々が見るともなく、そこに現代の美術表現が置かれた光景を目にする現象が生まれている。

そうなって改めて気付くことは、同じ文化の範疇にくくられるものの、現代的なものや伝統的なもの、視覚的なものとそうでないもの等々の間に存在する、見えない境界線の強固さである。砂丘館の庭園やたたずまいに引かれ、頻りに施設を訪れながら、関心のない美術は全く目に入らないという人たちもある。そういう人が、大半と言っていいかも知れない。

それでも、場合によっては、境界線が揺れることがある。倉庫を借りての音楽イベントでたまたま砂丘館にきたミュージシャンが、床の間に飾られていた絵に揺すぶられ、「絵を見る」習慣が付き、新潟絵屋や砂丘館によく来るようになったりする。日本茶インストラクター協会という団体が開催する砂丘館の座敷での茶会に、床の間に好きな絵を飾り、亭主として話をしよう頼まれるということもあった。茶会に参加した年配の方が、蔵のギャラリーの企画展を休憩時間に見、飾られていた絵を画廊を通して購入して下さったりもした。まれに起こるそうしたことが面白い。

伝統家屋や古い建築が現代美術の展示会場となるケースは、美術館を離れた場での美術の催しが全国に広がるなかで確実に増えてきているようだ。砂丘館もそのようなケースのひとつに数えられたりするわけだが、同時にそれが伝統の学びの場や、公民館的機能を持つ集会場でもあるがゆえに生じてきた、「境界線が揺れる」現象に、私は思いがけない興味を感じる。

砂丘館の最大の特徴は、そこにあると言ってもいいのかも知れない。

(美術評論家・砂丘館館長)



「ふれている遠さ 3人の写真家の『まなざし』  
牛腸茂雄・関口正夫・三浦和人」展  
(2009年2月13日～3月22日)  
展示風景



「砂丘館を個人コレクションで飾る1  
山下透コレクション」展  
(2009年7月22日～8月23日)  
床の間に飾られた李禹煥の絵と流政之の石彫